

資料

□・B・ヴォロブエフ

ロシアにおける軍事的・封建的 帝国主義の本質の問題によせて

「軍事的・封建的帝国主義」という用語は、周知のように、わが国の史学では数十年間も存在している。しかし、今日にいたるまで歴史家や経済学者たちのあいだでは、この用語の内容の解釈において一致点がみいだされない。ア・エリ・シドロフの疑いもない功績はつぎの点にある。すなわち、彼は要するに、ロシアにおける軍事的・封建的帝国主義の本質の問題にかんする学術文献をはじめて体系化しようところろみ、この文献を詳細かつ適切なかたちで批判的に分析したのである¹⁾。その結果として彼は、わが国の文献においては「軍事的・封建的帝国主義」という用語自体の理解が一致していないということを確認しただけでなく、さらには、この不一致がなぜ存在するかという原因をもあきらかにした。「軍事的・封建的帝国主義」という概念の特徴づけにさいしては、この対象と関連のあるレーニンの所説の恣意的な、そしてしばしば矛盾した解釈、つまり、テキストの意味からも、また軍事的・封建的帝国主義にかんするヴェ・イ・レーニンの所説の精神からもしばしばかけはなれた解釈が、われわれのもとではいたるところにみうけられるというア・エリ・シドロフの見解にたいしては、同意しないわけにはいかない。

とくにア・エリ・シドロフが、あたかもヴェ・イ・レーニンはロシア帝国主義を軍事的・封建的帝国主義と呼び、まさにこのように呼ぶことによってロシア帝国主義の民族的風貌を特徴づけたかのように主張するまちがった見解にたいして断乎として反対意見をのべたばあい、彼はまったく正しいのである。

- 1) ア・エリ・シドロフ「軍事的・封建的ロシア帝国主義にかんするヴェ・イ・レーニン」、『ソ連邦史』1961年第3号〔邦訳、「ヴェ・イ・レーニンのロシア軍事的・封建的帝国主義論」、桃山学院大学国際関係研究室『国際関係研究』第5号、45—68ページ〕。以下、テキストの引用はこの論文にもとづいておこなう。

先行する問題文献の批判と同時に、ア・エリ・シドロフは、「軍事的・封建的帝国主義」というレーニンの定式についての自己の解釈をあたえた。要言すれば、彼の見解は、軍事的・封建的帝国主義は帝国主義時代のツァーリズムであるという点に帰着する(70ページを参照せよ)。エム・ヤ・ヘフテルの見解¹⁾に同意しながら、彼は、ヴェ・イ・レーニンはツァーリズムを軍事的・封建的帝国主義と呼び、まさにそのこ

とによって帝国主義の諸条件における帝政ロシアの政治的上部構造の主要な特質を規定したのである、と考えている。レーニンの定式のこのような解釈をおこなっているのは、ア・エリ、シドロフだけではない²⁾ということをおこなうべきではない。

- 1) エム・ヤ・ヘフテル「第一次ロシア革命の経済的前提諸条件」、『ソ連邦科学アカデミー歴史研究所の報告と報知』第6集、モスクワ、1955年、23—24ページ。
- 2) ヴェ・イ・マンツェフ「帝政ロシアの軍事的・封建的「帝国主義」にかんするヴェ・イ・レーニン」、論文集『政治経済学の諸問題』、モスクワ、1960年、イェ・デ・チェルメンスキー『ソ連邦史——帝国主義時代——』、モスクワ、1959年、イ・エム・プロヴェル『ロシアにおける帝国主義の基本的諸特質』、モスクワ、1961年（原稿校正中までのもの）を参照せよ。

軍事的・封建的帝国主義の本質の問題についてア・エリ・シドロフが提起した解決がどのように人を引きつけるものであるにせよ、われわれは、それに同意することはできない。第一に、軍事的・封建的帝国主義にかんするレーニンの所説の分析を自己の論証の基礎におきながら、ア・エリ・シドロフは、これらの所説の解釈と自己の結論とにおいてかならずしも首尾一貫してはいない。まさにそのことによって、彼は、彼が他の著者たちのばあいにあかみになし、たくみに批判したような欠陥をまぬがれなかったのである。

第二には、ア・エリ・シドロフによって提起されている論争問題の解決は、われわれの見解では、学問上の点でみのりゆたかなものではなく、また有望なものでもない。それはおそらく、つぎのような時期の——すなわち、ブルジョア的な諸連関と諸関係とが一般に支配的な役割をはたしているなかで、政治ととくに経済において封建的特徴と資本主義的特徴とが密接にからみあっていた時期の——ロシアの実際の現実の一面的な、そして単純化された図式的な描写にみちびくであろう。

それにもかかわらず、「軍事的・封建的帝国主義」にかんするレーニンの定式の内容のア・エリ・シドロフによる解釈のなかには、貴重な、新鮮な、そして興味深い考察や考えが少なからず存在している。たとえば、「帝国主義」という概念のなかにヴェ・イ・レーニンは二重の意味をふくめていたと彼が書いているばあい、彼はまったく正しい。あるばあいには（もっともしばしば）レーニンは、帝国主義を資本主義の最新の段階——独占資本主義——と呼んだ。しかし彼は、しばしば「帝国主義」という概念をことばの旧来のより狭い意味にもちい、強奪的、抑圧的な政策、他国や他民族の略奪一般を意味したのである¹⁾。

- 1) 『レーニン全集』第21巻、373ページ〔422ページ〕、『レーニン全集』第27巻、31ページ〔39—40ページ〕を参照せよ。

おそらくこの正しい考えは、軍事的・封建的帝国主義にかんするレーニンの所説を著者が分析するにあたっての出発点として著者に役だったにちがいない。まして洞察

力のある研究者としてア・エリ・シドロフは、ヴェ・イ・レーニンが帝政ロシアの軍事的・封建的帝国主義についてのべたばかり、レーニンはそれを民族・植民地問題、ツァーリズムによってもちいられてきた民族抑圧の特別に時代後れの諸形態とむすびつけたということを見とめないわけにはいかなかった(57ページ)のであるから、なおさらのことそうであろう。

まさに同様にア・エリ・シドロフは、ヴェ・イ・レーニンが「軍事的・封建的帝国主義」いう定式を提起せざるをえなかった歴史的環境と事情とを基本的には正しくのべたが、しかし彼は、自己の考察から論理的にでてくる結論のすべてを引きだしたわけではない。

軍事的・封建的帝国主義にかんするヴェ・イ・レーニンの所説は少数しか存在せず、そのすべてが第一次世界大戦期にかんするものである。しかし、あたかもこれらの所説が第一次大戦前の諸著作のなかに共通の根をもっていないかのように考えるならば、それは正しくないであろう。残念なことには、ア・エリ・シドロフをもふくめて軍事的・封建的帝国主義について書いているわが国のすべての研究者たちは、この問題をみのがしてきた。

それにもかかわらず、われわれは、軍事的・封建的帝国主義にかんするヴェ・イ・レーニンの直接的な所説の分析からはじめなければならない。レーニンの所説は少数しか存在せず、全部で五つだけである。「革命の二つの方向について」という論文における所説からはじめるのが、もっとも正しいであろう。というのは、第一にそれ

は、あとであきらかにするように、独自の意味をもったその内容によって特色づけられており、第二にはそれは、軍事的・封建的帝国主義の問題全体にかんするア・エリ・シドロフの見解を裏付けるもっとも主要なものではないにしても主要な論証の一つとして、ア・エリ・シドロフ(および他の学者たち)のために役だったからである。

この論文のなかで、ヴェ・イ・レーニンはつぎのように書いた。「プロレタリアートは、権力の獲得のため、共和制のため、土地没収のために、すなわち、農民層をひきつけるため、農民層の革命的な力を汲みつくすため、軍事的・封建的「帝国主義」(＝ツァーリズム)からブルジョア的なロシアを解放することに「非プロレタリア的人民大衆」を参加させるために現に闘っているし、また将来も闘うであろう」¹⁾。

1) 『レーニン全集』第21巻、382—383ページ [433ページ]。

主としてこの引用文の分析を根拠として、ア・エリ・シドロフは、ヴェ・イ・レーニンにあっては軍事的・封建的帝国主義は帝国主義時代のツァーリズムである、という結論に達したのである。

このレーニンの所説のかくも一本調子の解釈は、われわれには正しくないとおもわれる。じじつそうである。論文全体がなにを任務とし、どのような内容を持ち、またなにを志向しているかを考慮するならば、彼の綿密なテキスト分析は、ヴェ・イ・レーニンは、ツァーリズムが軍事的・封建的帝国主義と同意義のものであるかのように主張する根拠をけっしてあたえなかったということをしめしてくれる。

周知のように、「革命の二つの方向について」という論文は、ブレハーノフとトロツキーとに反対して書かれたものである。トロツキーは、帝国主義時代の到来を口実にして、ロシアにおけるブルジョア民主主義革命の不可避性を否定しようところみだ。ヴェ・イ・レーニンは、トロツキーの反マルクス主義的・反歴史的な見解を非難しながら、帝国主義にかんするトロツキーの引証を「ことばの遊戯」と呼んだ¹⁾。帝国主義ということばのごまかしが許しがたいことをよりいっそう容易に理解されるようにしめし、ロシアは帝国主義時代に突入しているにもかかわらず、ブルジョア民主主義革命が切迫していることを立証するために、ヴェ・イ・レーニンは、彼にとっては稀なことではない論争的方法に訴えた。すなわち、彼が論争の相手がまちがって使用している概念（このばあいでは「帝国主義」）をその相手からとり、具体的・歴史的な内容によってこの概念をみたしたのである²⁾。（引用文のように）カッコのなかにいれられており³⁾、「軍事的・封建的」という形容詞によって補足されている「帝国主義」ということばは、トロツキーに反対してむけられた現実的内容をおびていた。

1) 『レーニン全集』第21巻、382ページ〔432ページ〕を参照せよ。

2) ついでにいえば、ヴェ・イ・レーニンは、うゑに引用した引用文のなかではこの方法を二度もちいた。彼は、トロツキーに「非プロレタリア的人民大衆」ということばを強調し、これらのことばを非本来的なものとしてカッコのなかにいれ、そして、このような人

民大衆でありうるのは農民層だけであるということをしめしたのちに、まさにそのことによってトロツキー自身のことばをもってトロツキーを打ちのめしたのである（『レーニン全集』第21巻382—383ページ〔432—433ページ〕を参照せよ）。ヴェ・イ・レーニンの論争技術のこのような方法は、さらにしめそうとおもえばその例をあげることができるであろう。

3) ア・エリ・シドロフは、ヴェ・イ・レーニンが「帝国主義」ということばをカッコのなかにいれてもちいたという事実の原則的な意義をなにゆえか無視する傾向をもち、「軍事的・封建的帝国主義」を資本主義的帝国主義のうゑにまでおよぼすことの不当性だけをこの事実のなかにみいだしているにすぎない（64ページ）。

ヴェ・イ・レーニンのことばは、ほぼつぎのような意味に、すなわち、このときにロシアでは、その独自の「帝国主義」——軍事的・封建的体制——を一掃するという課題が日程に上りつつあるという意味に理解されてきた。レーニンによれば、軍事的・封建的「帝国主義」というのは、政治と経済とにおける封建制の主要な遺物のことである。というのは、彼は、それ（軍事的・封建的「帝国主義」）とツァーリズムとのあいだに等号をおき、ツァーリズムだけではなく地主的土地所有をも念頭においているからである。このことをまったく明確に指示してくれるのは、引用文の最初の部分であり、そこでは、共和制のため、地主の土地の没収のための闘争についてのべられ

ており、さらにまた、つぎのような命題、すなわち、「そしてプロレタリアートは、ブルジョア的ロシアをツァーリズムから、地主の土地と権力から解放することを………」¹⁾ という命題がはじまっている。

- 1) 『レーニン全集』第21巻、382—383ページ [433ページ]。

このおなじ論文のなかでヴェ・イ・レーニンは、ツァーリズムと地主的土地所有との一掃が、来るべきブルジョア民主主義革命の主要な内容であると再三再四書いており、しかも、そのばあいには彼は、ツァーリズムを軍事的・封建的帝国主義とはどこにおいても呼んでいないのであるが、このこともまた特徴的なことである。

だから、もしも軍事的・封建的「帝国主義」にかんするこのレーニンの所説の精神（ならびに文字）に忠実であるならば、あたかもヴェ・イ・レーニンが軍事的・封建的「帝国主義」とツァーリズムとを同一視したかのよりのべる結論にはけっして達しないであろう。

周知のようにスターリンは、ツァーリズムの利害と世界帝国主義の利害とのからみあいの原因を説明しようとするにあたって、このレーニンの定式を適用した。しかし彼は、「軍事的・封建的帝国主義」というレーニンの用語に拡大解釈をつけくわえ、そのことによって、「軍事的・封建的帝国主義」をツァーリズム全体に置きかえる機縁をあたえたのである¹⁾。だがやはり、スターリンも、レーニンの豊かな思想を単純化し図式化するスターリン特有の傾向にもかかわらず、この用語をカッコのなかに入れてもちい、まさにそのことによって、

「軍事的・封建的帝国主義」という概念自体の特質、条件性を強調したのである。

- 1) 『スターリン全集』第6巻、75ページ [90ページ] を参照せよ。

しかし、ヴェ・イ・レーニンのばあいによりいっそうもちいられており、われわれの見解では主要なものであると考えられるのは、「軍事的・封建的帝国主義」という定式の他の内容である。それは、以下の引用文からはっきりとみうけられる。「第二インターナショナルの崩壊」という論文のなかの欄外の註において、ヴェ・イ・レーニンは、「軍事的・封建的帝国主義」という概念をはじめともちいて、つぎのように書いた。「周知のようにロシアでは、資本主義的帝国主義は比較的弱いが、しかしそのかわり、軍事的・封建的帝国主義は比較的強力である」¹⁾。「社会主義と戦争」という論文のなかで、彼はこの思想をくりかえし、具体化した。「ロシアでは最新型の資本主義的帝国主義は、ペルシア、満洲、蒙古にたいするツァーリズムの政策のなかに完全にあらわれたが、しかし、一般にロシアでは、軍事的・封建的帝国主義が優勢である」²⁾。最後にヴェ・イ・レーニンは、「自決にかんする討論の総括」という論文のなかで、いくらかちがった形式において軍事的・封建的帝国主義について書いている。「……ロシアは平和時にも、はるかによりいっそう粗暴な、中世的な、経済的に後進的な、軍事的・官僚的な帝国主義にもとづいて、民族抑圧の世界記録をやぶった」³⁾。

- 1) 『レーニン全集』第21巻、203ページ、註 [226ページ]。

- 2) 同上、277ページ [312ページ]。
- 3) 『レーニン全集』第22巻、343—344ページ [421ページ]。

もしもわれわれがこれらのレーニンのことばをその文脈のままに受けとるならば、これらのことばにおいて問題になっているのは、より狭義の意味における帝国主義、すなわち、他民族の略奪と抑圧であるということが、たやすくわかるであろう。たとえば、「社会主義と戦争」という論文のなかでは、帝政ロシアをもふくむ諸大国がおこなった植民地略奪と他民族隷属化の政策が非難されている。この政策のなかにこれらの列強の帝国主義があらわれており、それゆえに、これらの列強がおこなった戦争は帝国主義戦争なのであった¹⁾。

- 1) 『レーニン全集』第21巻、276—278ページ [310—313ページ] を参照せよ。

「帝国主義」という用語のよりいっそう狭義の意味を、ヴェ・イ・レーニンは、種々様々な歴史的時代に適用した（奴隷制の土台のうえでの帝国主義、本源的資本主義の土台のうえでの帝国主義、封建的帝国主義、その他¹⁾）。この点でわれわれは、軍事的・封建的帝国主義の問題をとりあつかうにあたってア・エリ・シドロフがおかした一つの重要な手ぬかりを指摘しなければならない。彼は他の著者たちと同様に、ヴェ・イ・レーニンはロシアにおける帝国主義についてのべるばあい、資本主義的帝国主義と軍事的・封建的帝国主義とを区別し、また対置することさえあった、と正当かつ頑強に強調している。しかしア・エリ・シドロフは、ヴェ・イ・レーニンがこの

ばあいに資本主義的帝国主義として意味しているのは、資本主義の最高段階としての帝国主義ではなく、通例は、その狭義の理解における、つまり強奪的な帝国主義政策という意味における——しかし、すでに新時代の、すなわち最新の資本主義の時代の——帝国主義なのであるということを考慮していない²⁾。

- 1) 『レーニン全集』第21巻、7、277ページ [10、312ページ]、『レーニン全集』第22巻、295—296ページ [375—360ページ]、『レーニン全集』第26巻、135ページ [157ページ] を参照せよ。
- 2) 「資本主義的（もしくはブルジョア的）帝国主義」という用語は、その内容の点では、「帝国主義的（もしくは独占的）資本主義」という用語とけっして同意義ではない。

ここから、レーニン自身は彼の定式をロシア独占資本主義のうえにおよぼすことに反対していたと立証しようとするところだが、根拠薄弱なものであることがあきらかとなる。ヴェ・イ・レーニンにとっては、一方ではツァーリズムとひとしく軍事的・封建的帝国主義、他方では帝国主義的、独占的な資本主義は、相異なる社会的内容のカテゴリーとして単純には比較されうるものではなく、したがってまた、対置するには役だたないものであった。

ここで、「国際主義的言辞による社会排外主義的政策の掩護」という論文からのもう一つのレーニンの引用文を分析しておくことは、時宜にかなったものとなるであろう。なぜならば、この引用文もまたふつう

は、ヴェ・イ・レーニンが軍事的・封建的帝国主義とツァーリズムとのあいだに等号をおいたかのようにのべる主張のために利用されているからである。

ヴェ・イ・レーニンは上記の論文のなかで、ブルジョア民主主義革命が勝利したばあいにはロシア側の戦争の性格が根本的に変化することは不可避であると立証したマルトフに反駁をくわえながら、つぎのように書いた。「ブルジョア的かつ帝国主義的な諸大国のあいだの戦争の性格（帝国主義的、強奪的な性格——ペ・ヴェ）は、かりにこれらの列強のなかの一国において軍事的・絶対主義的・封建的帝国主義が急速に根絶されたとしても、すこしも変化しないであろう。というのは、このことによって、純粋にブルジョア的な帝国主義は、消滅してしまわないどころか、かえって強化されるだけだからである」¹⁾。

1) 『レーニン全集』第21巻、397—398ページ [449ページ]。

このばあいに念頭におかれているのは、ツァーリズムと帝国主義的資本主義とではなく、強奪的政策の二つの形態——軍事的・封建的帝国主義とブルジョア的帝国主義——である、とわれわれにはおもわれる。

ヴェ・イ・レーニンの他のいろいろの所説（そして彼は、ツァーリズムが打倒されたのちのロシア側の戦争の性格がどのようなものでありうるかについてたびたび検討したのである）によって、われわれは、たとえば、「ブルジョア的帝国主義」という概念のなかに彼がどのような内容をはめこみ、なにによってその強化を予見したかということを具体化することができる。た

とえば、「組織委員会とチヘイゼ派議員団には独自の方針があるか？」という論文のなかで、彼は、ブルジョア民主主義革命をむかえようとしているロシアにおいては、（西側諸国とはちがって）、「敵に勝つために革命を」¹⁾ めざすブルジョア的社會運動が存在している、と指摘した。

1) 『レーニン全集』第22巻、123ページ [154ページ]。

「ユニウスの小冊子について」という有名な論文のなかで、ヴェ・イ・レーニンはつぎのように書いている。「……ヨーロッパの先進的列強の帝国主義的戦争にまきこまれたロシアは、共和制的形態をとったところで、やはり帝国主義戦争をおこなうであろう」¹⁾。

1) 『レーニン全集』第22巻、302ページ [366—367ページ]。

周知のように、これはやはりそのとおりになった。二月革命後に第一位におしだされたのは、ブルジョア的帝国主義の契機であり、軍事的・封建的帝国主義はそっと退場していったが、しかし、ロシア側の戦争は、エス・エル＝メンシェヴィキのあらゆる呪咀にもかかわらず依然として強奪的、帝国主義的であった。

うえに引用したレーニンの引用文に照らしあわせてみるならば、このような軍事的・封建的帝国主義とは、いったいなにであろうか？

ヴェ・イ・レーニンの方法にしたがえば、これは、封建制の遺物を土台にして他民族にたいしておこなう帝国主義的、強奪的、略奪的な政策であるとのべることができらるうが、周知のように、この封建制

の遺物は、ロシアでは異常に強力であった。

国内において民族問題の領域では、ツァーリズムを頭目とする封建制の遺物は、非ロシア諸民族の抑圧の主要なみなもとであった。ツァーリズムの民族政策は、帝国主義時代においても、ブルジョア的というよりはむしろ封建的な性格をおびていた。それはなによりもまず、農奴主的地主と軍閥・官僚的支配層との利害によって規定されたのである。

これに依じて、民族政策の諸方法もきわめて粗暴であり、中世的であり、あからさまに略奪的であったが、それらは、「異民族」の屈辱的な迫害、彼らの民族的諸権利の侵害、彼らの富（土地その他）の直接的な奪取、半封建的な苛税、中央ならびに地方行政機関の暴政、その他のなかにあらわれていた。軍事的・封建的帝国主義の政策にとって特徴的であったのは、より洗練された、資本主義的な搾取方法よりも経済外的な、軍事的・暴圧的な搾取方法の方が優勢であったということである。まさにそれゆえにこそ、ヴェ・イ・レーニンは、帝政ロシアでは他民族の抑圧と略奪とは、「異民族」にたいする半封建的な搾取によっておこなわれていると書いたのである¹⁾。

1) 『レーニン全集』第21巻、278ページ [312—313ページ] を参照せよ。

対外政策と植民地膨脹との領域においては、帝政ロシアは第一番に、支配階級である農奴主的地主の利害からやはり出発し、主として、原始的蓄積その他の時代にとってより特徴的であった植民地の封建的強奪・略奪の彼らに固有な諸方法を行使した。だ

から、他民族の略奪と抑圧の政策としてのロシア帝国主義の本質を、ヴェ・イ・レーニンは、「軍事的にして封建的な」というたった一对のことばによってあかるとにだしているのである。

ヴェ・イ・レーニンが「軍事的・封建的帝国主義」という用語をなぜ第一次世界大戦期にはじめてもちいたかという理由は、われわれが理解するのに困難ではない。若干の人びとは、彼がこのことをおこなったのは、ロシアにおける来るべき革命の諸段階——はじめは、軍事的・封建的帝国主義（すなわち、ツァーリズム）に反対するブルジョア民主主義革命、つづいて、帝国主義的資本主義に反対する革命——をよりいっそうはっきりと強調するためであった、と考えている。

じじつ、「軍事的・封建的帝国主義」という用語をレーニンが必要としたのは、帝国主義戦争を内乱に転化させよというポリシェヴィキの戦術的スローガンと、このスローガンからでてきたところのポリシェヴィキによって提起された革命的敗北主義の政策との正しさを、よりいっそう全面的かつ深遠に基礎づけるためであった。

ヴェ・イ・レーニンは、すでに第一次世界大戦のそもそものはじめにおいて、交戦しつつある両グループのいずれの側からしてもこの戦争は帝国主義的、反動的な性格をおびていることをあきらかにした。彼は、交戦しつつある列強すべての支配階級によって提起され、社会排外主義者と防衛主義者たちによって武器とされた「祖国擁護」というスローガンが、虚偽にみちたものであり、排外主義的な内容をもっている

ということをしめした。

しかし、これだけではなかった。当時のロシアの諸条件においては、帝政ロシア（すなわち、「自国の」政府——ツァーリの君主制）が戦争において敗北することは最小の悪にすぎず、プロレタリアートの党は、「自分の」政府の敗北を促進することなくしては、自分の革命的スローガンを実行することはできないということを、勤労大衆に確信させる必要があった。一方においては、このとおりであった。他方では、露骨な排外主義者たちや、社会主義運動における「左翼」を思想的に粉碎することなくしては、ロシアのすべての民族の勤労者がツァーリズムに反対する行動を統一する道を掃き清めることはできないという事情が形成されつつあった。なぜならば、彼らは、ツァーリズムによって抑圧された諸民族の民族解放運動の正当性とこれらの諸民族の自決権とを否定したからである。

このためには、「祖国擁護」というスローガンによって掩護される可能性をもっていたツァーリズムの真の風貌をあかすみにだし、民族・植民地問題におけるツァーリズムの政策の現実的基礎を暴露することが必要であった。ツァーリズムによっておこなわれる戦争は、帝国主義的略奪者たちの不正義の、強奪的な戦争のなかで、反解放的・反民族的な性格をもった特別に反動的な性質をおびていたということを立証することに、具体的には任務が存在したのである。そして、ヴェ・イ・レーニンはこのことをおこなった。

彼は、帝国主義戦争の参加者たちのなかでツァーリズムは、ヨーロッパにおけるも

っとも後進的な政治体制をあらわしていたということをしめした。ヴェ・イ・レーニンは、つぎのような生き生きとしたことばによってそれを証明する。「とくに卑劣で野蛮なロシアのツァーリズムは、（もっとも反動的である）」¹⁾。ロシアのツァーリズムの帝国主義的目的と動機との基礎によこたわっているのは、純粹に資本主義的な利害ではなく、そこには、主としては、反動的な地主と軍閥との利害、およびツァーリの君主制の王朝的な利害がよこたわっている。ヴェ・イ・レーニンは、ロシアのツァーリズムの帝国主義を、ドイツ帝国主義との類推により、封建的・王朝的な目的、ブルジョアジーの従属的地位を念頭におきながら、君主主義的と呼んだ²⁾。

1) 『レーニン全集』第21巻、7ページ [10ページ]。

2) 同上、7ページ [10ページ] を参照せよ。

ヴェ・イ・レーニンは、帝政ロシアにおける民族抑圧の特別に後進的で凶暴な諸形態、ツァーリズムによる他民族の搾取の半封建的な性格を暴露するにあたっては、すこしも手心を加えない。彼はつぎのように指摘した。「……戦争によってツァーリズムは、ロシアの抑圧する民族の数をふやし、彼らにたいする抑圧を強化し、そのことによって大ロシア人自身の自由のための闘争をも掘りくずそうと志向している」¹⁾。

1) 『レーニン全集』第21巻、278ページ [312—313ページ]。

彼によってみとめられた「軍事的・封建的帝国主義」という用語は、帝政ロシアの強奪的政策の特質——特別に反動的な目

的、粗暴な、中世的な方法、植民地的・民族的抑圧の極端な苛酷さ——をこの上なくみごとに特徴づけたのである。レーニンによれば、ツァーリズムの軍事的・封建的帝国主義は、反動的・反人民的なブルジョアの帝国主義よりもやはり 100 倍も悪いのである。

だから、この用語が出現したさいの事情は、ヴェ・イ・レーニンが軍事的・封建的帝国主義と呼んだのは、国内だけではなく国外における他民族にたいするツァーリズムの抑圧と強奪であり、そのばあいに、この軍事的・封建的帝国主義の推進的動機と方法とは、資本主義的な起源よりもむしろ封建的な起源をもっていたということ、さらにもう一度証明してくれるのである。

われわれにのこされているのは、軍事的・封建的帝国主義とツァーリズムとのあいだの相互関係にかんする問題をあきらかにすることである。すでにみてきたように、ヴェ・イ・レーニンの諸著作のなかでは、これらは不可分離的な関連においてみいだされる。われわれの見解では、もしも軍事的・封建的帝国主義（カッコにいれられていない）にかんするレーニンの所説の精神と文字とにしたがうならば、ツァーリズムこそが軍事的・封建的帝国主義の政策の体现者と遂行者とであったという結論に達しないわけにはいかないだろう。

ア・エリ・シドロフの意見（64ページ）に反して、ヴェ・イ・レーニンは、「軍事的・封建的帝国主義」という定式のなかにツァーリの専制の反動的政策の**すべての**側面をはめこんだわけではけっしてない。反対に彼は、軍事的・封建的帝国主義の活動

範囲（そしてこれに応じて、定式の内容）を民族・植民地問題に限定し、この軍事的・封建的帝国主義によって「半封建的な型の帝国主義政治」¹⁾を意味したのである。他のいろいろのばあいにヴェ・イ・レーニンがツァーリズムの帝国主義もしくはツァーリの帝国主義について書いている²⁾のは、偶然なことであると考えすることはできない。われわれの意見によれば、このツァーリズムの帝国主義もしくはツァーリの帝国主義は、軍事的・封建的帝国主義と同義語なのである。

- 1) 『レーニン全集』第23巻、122ページ [143ページ]。
- 2) 『レーニン全集』第22巻、327ページ [399ページ]、『レーニン全集』第23巻、296ページ [333ページ]を参照せよ。

第一次世界大戦期に「軍事的・封建的帝国主義」という用語をはじめもちいたのちに、ヴェ・イ・レーニンは、この用語を大戦前の平和時にもおよぼしたのである¹⁾。ツァーリズムの民族政策の基礎にかんするヴェ・イ・レーニンの大戦前の所説を検討してみるならば、われわれは、これらの所説のあとにのべられた軍事的・封建的帝国主義にかんする彼の所説と、これらの所説との継承関係をたやすくみつけだすであろう。たとえば、「フィンランドにたいする戦役」という論文（1910年）のなかで、彼は、ツァーリズムの現代の民族政策の基礎には、「すべての「異民族」を圧迫してきた専制の旧式の民族主義」²⁾がよこたわっていると書いている。ヴェ・イ・レーニンは、まさに「旧式の民族主義」が、他民族

にたいする「わが国の専制の」³⁾政策であると指摘している。大戦前の他の論文、「民族自決権について」(1914年)のなかで、ヴェ・イ・レーニンは、「この民族主義は、ブルジョア的というよりもむしろ封建的である」⁴⁾と指摘して、この民族主義の階級的本性をあかるとした。

- 1) 『レーニン全集』第22巻、343ページ [421ページ] を参照せよ。
- 2) 『レーニン全集』第16巻、153ページ [181ページ]。
- 3) 同上、154ページ [182ページ]。
- 4) 『レーニン全集』第20巻、384ページ [440ページ]、ゴチックはペ・ヴェのもの。

ロシア帝国主義(強奪的政策という意味における)もまたやはり、ブルジョア的というよりはむしろ軍事的・封建的であったという連想が発生してくるのはやむをえない。他民族の抑圧と略奪というおなじ政策全体のあたらしい規定——「軍事的・封建的帝国主義」——を大戦時に導入するにあたって、ヴェ・イ・レーニンは、「わが国の専制の」民族政策は「旧式の民族主義」の政策であるとして特徴づける自己の従来の特徴づけのうえに立脚したということは、あきらかではなからうか。「軍事的・封建的帝国主義」という定式——これは、「専制の旧式の民族主義」という従来レーニンの定式を、あたらしい事情と外在的な諸要因(帝国主義戦争、ツァーリズムの膨脹主義的計画、その他)を考慮して具体化し、よりいっそう発展させたものである。あたらしい定式は、旧来の定式を補足し、これにとってかわった。というのは、それ

は、たんにツァーリズムによる「自国の」諸民族の略奪と抑圧だけではなく、ロシア外における半封建的搾取の領域を拡大しようとするツァーリズムの侵略的計画をもふくむことによって、ツァーリズムの略奪的な民族・植民地政策をよりいっそう完全に特徴づけているからである。

われわれのころもみた系譜論的な補説は、ヴェ・イ・レーニンはロシアにおける軍事的・封建的帝国主義についてのべるにあたっては、ツァーリズムの強奪的、抑圧的な植民地政策を念頭においていたということ、もう一度しめしてくれるのである。

このようにして、われわれは、ヴェ・イ・レーニンのいろいろの所説と当時のロシアの実際の現実とを分析することによって、軍事的・封建的帝国主義はツァーリズムの政策のすべての側面をおおうものではなく、この二つの現象(軍事的・封建的帝国主義とツァーリズム)はけっして同一のものではないということを確認した。「軍事的・封建的帝国主義」という用語は、他の諸大国と比較したさいの帝政ロシアの強奪的、帝国主義的な政策の特質を規定するためにヴェ・イ・レーニンによって導入されたものであり、それは、民族・植民地問題におけるツァーリズムの政策の主要な特質——この政策においてはブルジョア帝国主義的な目的、動機、そして方法よりも軍事的・封建的な目的、動機、そして方法が優勢であるということ——だけの特徴づけているにすぎない。

もしも「軍事的・封建的帝国主義」という用語の内容をツァーリズムの強奪的政策

だけに限定すれば、われわれはまさにそのことによってこの用語の意義を特殊的にして狭い意味にまで低めることになるであろうと考えるならば、それはまちがいであろう。封建領主と絶対主義との全能がロシアにおいて確立し、強固なものとなり、長期にわたって存続するうえにおいて、他民族の略奪と抑圧とがどのように巨大な役割をはたしたかについては、ここではのべる必要はないであろう。ツァーリズムに反対する闘争の時期にわが党が、ツァーリズムによって抑圧された諸民族の解放闘争においてツァーリズムの植民地・民族政策を暴露することにひじょうに重要な地位をあたえたのは、偶然なことではない。

それとともにわれわれは、軍事的・封建的帝国主義をツァーリズム全体と同一視することに賛成する若干の人びとが、ロシアにおける農奴主的地主の権力の威力と生命力との基礎にはツァーリの対外侵略と民族抑圧との政策がよこたわっていたということを示し、このような同一視の正当性を根拠づけようとところみているのをみすごすわけにはいかない¹⁾。

1) エリ・ア・ポタポヴァ、カ・エフ・シャチーロ「ロシア帝国主義の軍事的・封建的な性格にかんする問題の審議」、『ソ連邦史』1961年 第4号、224ページにおけるエム・ヤ・ヘフテルの発言。

ツァーリズムが自己の階級の経済的弱体化を補強し、「異民族」の略奪と抑圧、および対外膨脹によって自分の地位をつよめようと発作的にところみたことはまずだれも否定しないだろうけれども、20世紀はじ

めのロシアにかんする以上のような論証は、理論的にもまた歴史的にもまちがっている。

たとえばヴェ・イ・レーニンは、後進的な国家体制（ツァーリズム）がひじょうに強固であった原因としては、国の経済における前資本主義的諸関係の存続、資本主義と階級分化との不十分な発展を考えていた¹⁾。

1) 『レーニン全集』第20巻、375ページ〔430ページ〕を参照せよ。

いろいろの事実は、ツァーリズム権力の強化における他民族の略奪と抑圧との政策の役割が、資本主義時代には低下したということを示している。この政策は、ツァーリズムの基礎だけではなく、資本主義の基礎の弱体化を客観的には促進した。それは、ツァーリズムによっておこなわれた両大戦（日露戦争と世界大戦）は、ツァーリズムが敗北するところとなり、ツァーリズムの革命的崩壊を促進したということを示すだけで十分であろう。

ところが、帝政ロシアの支配的諸階級の「実践」においては植民地および「異民族」の資本主義的搾取ではなく、軍事的・封建的搾取が優勢であった結果として、ロシア資本主義は、労働者階級の上層部（いわゆる労働貴族層）の経済的買収によって労働者階級の隊列を解体させる重要な源泉を喪失したのである。

「軍事的・封建的帝国主義」という自己の定式をヴェ・イ・レーニンがあてはめたのは、帝国主義時代のツァーリズムにたいしてであり、彼はその定式によって、あたらしい歴史的時代における政治的上部構造

の特質を特徴づけたのであるというア・エリ・シドロフのテーゼ(57、61、70ページ)もまた、反駁をよびおこす。まず第一に、ア・エリ・シドロフはつぎのような論理的矛盾をおかしている。すなわち、彼は帝国主義と呼びながらも、それと同時に、この規定を帝国主義以前の時代のツァーリズムのうえにもおよぼすことを正しいと考えている(59、70ページ)。もしも先行する時代のツァーリズムも帝国主義時代の政治体制の特質をもっていたとすれば、この帝国主義時代の政治体制の特質は、いったいどのようなものなのであろうか? 「特質」という概念自体は、特異的なもの、特殊なものを区別することを要求する。ところが、軍事的・封建的帝国主義のばあいには、われわれは反対に、帝国主義はもろん資本主義よりもはるかに以前のツァーリズムに固有なものであったような特徴の継承、反復と関係をもっているのである。もしもア・エリ・シドロフと彼の支持者たちがよりいっそう首尾一貫したならば、彼らは、ツァーリズムがかつても(この概念の彼らの理解における)軍事的・封建的帝国主義であったとすれば、20世紀のはるか以前にははるかにいちじるしくそうであったということをみとめなければならないであろう。帝国主義時代になってツァーリズムはその封建的な「生氣」を失い、自己の一般的政策だけではなく帝国主義政策においても、軍事的・封建的な利害や方法をブルジョア的な利害や方法と結合させたのである。

軍事的・封建的帝国主義とツァーリズムとの同一視は、事実上は、帝国主義時代に

における政治的上部構造としてのツァーリズムの進化にかんする問題をぼやかすか、もしくはこの問題を撤回するにいたり、したがってまた、この進化の実際の特質をあきらかにすることを困難にするのである。ヴェ・イ・レーニンが1910年につぎのように強調したのを想起しよう。すなわち、ツァーリの専制は、その社会的本質の点でありながらも、それにもかかわらずそれは、すでに「いままでと同じものではなく」、「あたらしい歴史的期間にはいった」¹⁾のである。

1) 『レーニン全集』第16巻、178ページ [211ページ]。

帝国主義時代における政治的上部構造としてのツァーリズムの主要な特質は、ツァーリズムがブルジョア君主制への転化の道にそって前進し、緩慢にして矛盾にみちているにせよブルジョア君主制になりつつあったということである。1905年の革命ののちのツァーリズムのブルジョア的変質についてのメンシェヴィキ的・清算主義的な当て推量に反対して断乎として闘ったほかならぬヴェ・イ・レーニンは、この1905年の革命ののちのツァーリズムを「半ブルジョア的ツァーリズム」¹⁾と呼んだ。

1) 『レーニン全集』第15巻、368ページ [388ページ] を参照せよ。

われわれは、ツァーリズムと軍事的・封建的帝国主義との同一視からは多彩な歴史的景の一面的な暴露だけしか不可避免的にでてこないということ、すなわち、この多彩な景においてただ封建的な色彩だけしかみえず、20世紀はじめのロシアの風貌を

窮局において決定したブルジョア的な色彩には余地がのこされないのであるということ、一般的に指摘しておかなければならない。

ツァーリズムを軍事的・封建的帝国主義として特徴づけるところの、論争を呼びおこす、根拠の十分でない特徴づけとはちがって、われわれは、1905—1907年の革命ののちにおけるロシアの政治体制の特質について、六月三日的君主制というレーニンの注目すべき、正確な、そして生き生きとした規定をもっている。レーニンによれば、この六月三日的君主制の年代上の範囲は事実上では、1904年から1916年にかけての時代、すなわち、帝国主義のほとんど全時代におよぼすことができるのである¹⁾。この規定は、ソビエトの文献では以前から知られているが、しかし残念なことには、六月三日的な政治制度の歴史は、歴史家たちによっていまなお十分には研究されていない。

1) 『レーニン全集』 第25巻、111ページ [133ページ] を参照せよ。

このようにして、軍事的・封建的帝国主義にかんするレーニンの所説にたいして、これらの所説のなかにつめこまれた完全に明確な内容と比較してより拡大された意味を付加するどのような根拠も存在しない。

ロシアにおける独占資本主義の民族的特殊性の解明にかんしていえば、これは大きな、いちじるしく独立した問題である。その解決のためにはそれは、補足的な理論的ならびに具体的・歴史的な研究を必要とする。軍事的・封建的帝国主義、政治と経済とにおける農奴制的遺物の役割にかんして、また、帝国主義と前資本主義的諸関係とのからみあいその他に関してヴェ・イ・レーニンの諸労作のなかにもふくまれているいろいろの所説は、疑いもなく、この仕事における導きの糸となるにちがいない。

——論文集『ロシアにおける帝国主義の特質について』（ソ連邦科学アカデミー刊・1963年）、73—85ページ、所収——

[福 富 正 実 訳]